
第二の人生はゲームの妨害？

ドリアン味のガム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

第二の人生はゲームの妨害？

【Nコード】

N4660Z

【作者名】

ドリアン味のガム

【あらすじ】

「…………マジですか？コレ」一人の神が呟いたその一言。別の世界の神の余りにも目に余るその所業を見ていられなくなった他の世界の神様…………。そしてその戦い台無しにしようと…………

この作品はてんびん座さんの「第二の人生はゲームらしいです」の二次創作、もしくは三次創作です。

キャラ崩壊、キャラ死亡、努力型、転生前はリアルにチートな転生

者が戦いに横槍して混沌にする作品です。

私の仕事はサポータージュー！by神（前書き）

てんびん座さんから許可を頂いて書きます。

「第二の人生はゲームらしいです」の二次創作です。
ベルツ側転生者側を含めてしっかりと……フッフ

私の仕事はサボタージュ！！by神

「あゝあゝ、今日も忙しいですね」

全く、何で神様って言うのは有名すぎると神格があがりますかね……
……僕の手だけは忙しそうに書類に記入したりしています。

「何かこう、書類に目を通すのも飽きてきましたね」

僕は一瞬だけちら見し、その後書類をすべて宙に上げ……。

「ハッ！！！」

高速で判子を押し捲った、その速度は光をも越えた！！

「終わりましたよ！！！」

「そ、じゃあ次ね」

そしてまた書類を机に乗せる茶髪のサイヤ人へアーの少年と桃色の髪をした東洋人の少女が！！！！

「ノー！！！！折角終ったのに何ですか！！？」

僕が涙目で叫びますが、茶髪の少年はそれを無視し「さうて、仕事仕事」と言っ去り………桃色の少女は「うえへへ、がんばって

ね」と言っ て去りました。

「こうな っ たらボイコッ トです!!」

そう言っ て僕は この閉ざされた魔界から出ることにしました!! サ
ボター ジュじゃあ 無いですよ!!

「GO TO THE HEAVEN!!」

さあ!! 今こそ、救われぬ者に救いの手を!!

「失礼しますぞ、 様」

そして運悪く扉が開いて誰かが……っ て貴方は!!

「ちよちよちよ!!!! どれ」

「フン!!!!」

「ぶへ!!!!?」

し、神界一のパワーで知られる究極の魔神…… 阿修羅が何故……
…ガクッ。

「大丈夫ですか？　様」

「やった張本人が言いますか？それを」

危うく昇天しかけたよ…………。

「で、何の用ですか？阿修羅さん」

「実は……これを見ていただきたくて……」

この人は無駄が一切無いんですね、転生者を送り出すときかは以外にフランクでしたけど。

つかあの転生者達は本当に人間ですか？どう見ても突然変異とか作り物じゃあ無いですか。

「で、これは一体なんですか？」

どう見ても別の世界の報告書ですね。

神界といってもかなり違うんですね、これがまた複雑なんですよ。
まあ簡単に言ってしまうえば人間界の平行世界パラレル・ワールドのような物です。

神界でもその存在は明らかにされていますが普通は他の神界、もしくは他の神界が管轄する世界に行く事は出来ません。
それはどんなに神格や神力、存在の理念が上がっても辿り付けません。

一部の例外を除けばですがね。

「ここに書かれてある事を読まれてください」

「…………マジデすか？コレ」

そこに書かれていたのはその世界の状況でした。

一人の人間が転生してそれで神になり……………そして他の神を殺し上位神になった存在。

「外道過ぎるんじゃないですか、いくらなんでもこんなのを野放しにするのは危険すぎますよ」

神は殺す事が出来ない、それはあくまでこつちの世界の常識。
向こつちの世界の神は殺せるとしても……………これはやりすぎだ。

「まあアニメの世界とか言うのはどうでも良いんですが……………、転生者を使って争いを起こし多数の人間を殺してますね」

これは非常にやばいですね、いずれにせよこの外道はその世界の最高神になるでしょう。

まあ絶対に私達の世界に来る事は出来ませんが……………。

「…………貴方の言いたい事はわかりました」

「お願いします」

阿修羅はそのまま部屋を出て行きました。

「さて、転生者を作らないと」

向こつちの世界のルールに乗っ取ったやり方にしなければ。

そして私は机の上に「暫く留守にします、サボタージュではありません。詳しい事は阿修羅に」と書いた紙を乗せました。

「ここは何処だ、とでも言うと思ったか少年」

「それでも私は貴方より年上なんですけどね」

この人が私の転生者です、外道とは違い普通に生まれた人です。
生まれた年が違いますが……

「これから貴方には転生してもらいます」

「ほう、このおいぼれを六道輪廻の輪に」

「違います」

何ですか？

全く信仰の無い時代から死んだ人なのに……。

「まあ実際に見ているわけだからな」

本当にこの人人間ですか？

「じゃあこれから貴方には私が管轄する世界とは違う世界に飛ばします」

「構わん」

「では能力を三つまで、いえ、貴方の頭脳に直接入れます」

入れた直後に呻きましたが大した事は無いようですね。
さすがは武神と呼ばれるだけはある。

「……………決まったぞ」

「では言ってください」

「ならばこの写輪眼と輪廻眼をくれるか？」

「その二つはセットです、ですからその間に万華鏡写輪眼もついて来ます」

まああくまでこの人の写輪眼ですから能力は違うんですよね。

「ただ輪廻眼は弱体化はします」

魂を奪い取る力とか蘇生させる力は無理です、外道魔像の封印は三時間すれば良いですね。

そしてチャクラではなく魔力になりますし。

「構わない、次はFate/stay nightのキャスターの力をくれるか？」

「一応弱体化はします、技術等は使えません。まあ貴方ならば自身の力で作れるとは思いますが」

あくまで能力、技術ではありませんしね。

ただこの人の場合は作れますね、前世でも色々と作ってましたし。今回はサービスとかではなく戦争に飛び入り参加ですのでやっぱりこういうのに特化した人でなければ……。

「最後は魔力は高めにしてくれ」

「分かりました、では飛ばしますよー!!」

私は一瞬だけ本気になり空間を裂きました。

「ほお、これは凄いな!!まさか生身で空間を裂くとは!!」

「まあ良いですから早く行って下さい」

「ふむ、ならわしが死んだときは手合わせをしてもらいものだ」

何で戦闘狂!!なんですか!!

まあ良いでしょう、この人は良い意味での戦闘狂ですし……。

「ではさらばじゃー!!」

そう言って恐れを知らない子供の用に飛び込んでいく。

「さて、次は何人か……」

最低でも後二人、これ以上は流石にきついですし。

「そっぴやさっきの人はアレを選びましたね」

良い事を思いつきました！！

「なら早くしないと！！」

独立した世界ほど操作は難しいですしね！！

その頃

「ばぶー（こんなのは聞いておらんぞおおおおおー！！）」

一人目の転生者はおしめを代えられていたのであった。

私の仕事はサボタージュ！！by神（後書き）

リヨク

「ついに始まりました！！ありがとうございます！！てんびん座さん！！」

ルナ

「まだ出てない私なんですがそこら辺はどうなるんですか？」

リヨク

「しっかりと罰は受けるよ、無双にはならないけど」

ルナ

「そうですね、なら逆に返り討ちにしても良いんですね」

リヨク

「本当に出来るんならね、今回の転生者は生前が化物クラスだから……………」

ルナ

「それはそうと現段階退場予定のキャラは誰ですか？」

リヨク

「厨二」

ルナ

「へー、そこは確定なんですね」

リヨク

「生かshとして意味ある？と言つよりベルツに殺されたときよりも悲惨にするけど」

ルナ

「ふふふそれは楽しみですね」

リヨク

「つーわけで次回はカツオ、出汁になるです!!」

ルナ

「全然違いますよーこの駄作者」

転生者と言っても所詮は人間じゃ！！（前書き）

タイトルと内容が違う……

転生者と言っても所詮は人間じゃ！！

わしは転生者である。

かなり昔の名言を変えて使って言ったみたもののどうにもならん
う。

まあ別にいいんじやがこの三年間はかなり厳しかったのう、幸い前
世での能力と症状は受け継がれていたからなあ。

取り合えず今は三歳じゃ、今は魔法の練習中。

「ホアタ！！！」

ベキ！！

木が折れたな、魔法による身体の強化じゃ。

これはわしが新しく作り上げた肉体、物質を強化するだけの魔法じ
や。

特典を貰ったさいに見せてもらった情報を引き出し、取り込み理解
する……………そんな当たり前の事をやっているだけじゃ。

と言っても……………

「やはり全盛期には届かないか」

そもそも比べる事自体が間違っておるのじゃが魔法で補えばと思っ
てみたものの……………。

精々全盛期の50%程度じゃな。

「まあ良しとするか」

そこら辺は機械手術等を使っていたからのう、頭脳から引き出せば機械強化によるパワーアップも可能じゃろう。

「さて、ご飯にするかのう」

と、言うわけでご飯を食べる事にする。

「今日は竜を召喚する日じゃからな」

わしはそう言つてそこら辺に寝転んでいた小さい竜を抱きかかえた。

「起きよミスト」

この竜はわしが卵から返した竜じゃ、赤い鱗がまた綺麗なのう……ルビーかと思うほどじゃった。

目はそれとは対照的に綺麗な青色じゃったがな。ちなみに雌の竜じゃ。

「かるるるる」

「それはすまんかったのう、まあこの後お主にはご飯をたらふく食べさせよう」

「かるるー!!」

「そうかそうか、じゃあ行くぞ」

今日はどんな飯が楽しみじゃわい。

「さて、召喚じゃな」

あの後ご飯を食い終わった後の為少し辛いがやるしかないのう。
ただ知らない人間が何人か観察しているのが分かるんじゃないかな。

「ふう……… 竜魂召喚」

何の変哲も無い呪文を唱えた。

そしてわしの懷からあるものが光り輝く。

金羊アルコンコインの皮、それはコルキスの魔女メディアの持つ竜を召喚する物じゃ。

ただメディアはこれを使い竜を召喚する事は出来ぬ、じゃがわしが生まれたのはルシエの里じゃ、竜を召喚するのはたやすい筈じゃ。
現に光り輝いているからのお……… 成功のはずじゃ。

「ここまででかい竜とは思わなかったがお」

と、言うより回りも失神しておる奴がいるのお、情けないったらありやしないわい。

そもそもわしの若い頃は（省略

まあ美しい竜ではあるがのお、むしろ龍か。
蛇にも似た長い体軀、鹿を連想させる巨大な角、鰐を思わせる巨大な口。

「わしと共に来ぬか？ 巨軀なる龍よ」

取り合えずそう呟いてみたものの返答は無い。
そしてその巨大な爪を振り下ろした。

グシャー！！

全く、周りは騒がしいのお、コレくらいどうって事も無いじやろう。
まあ強化を使っていなければ体は切り裂かれてたがのう……………。

「ほお、中々やるのお。どれ、お返しじゃー！！」

そのまま爪を持ち上げ腹に一発拳を入れる。
柔らかく、肉に打ち込む感触が手に伝わる……………木にしか練習して
いなかったが……………やはり肉に打つ感触は久しぶりじゃな。

龍はうめき声を上げ爪を振り下ろす、しかしそれを受け流す。
じゃがそのせいで右腕が使い物にならなくなったのお、一撃が強
すぎるせいか全くと言っても良いほどじゃあ。

右腕を魔法を使って治癒させつつ龍の攻撃をかわす、ただ周りの空
気も一緒に引き引き裂かれてかまいたちを生み出しわしの体を傷
つける。

これじゃあわしが先に負けるのお……………、と言うよりも絶対にわしが
負ける。

全盛期ならば勝てるかと断言できる、でも今の肉体じゃあわしは勝てん、これは絶対じゃな。

「じゃが最後まで足掻かせてもらうぞ、とどこかぬ身だとしても」

完全に治癒した魔力を使い腹を狙う、じゃが龍は蒼く光る魔力を体中に纏、回転した。

回転した直後に莫大な魔力が竜巻となってわしを襲う。

「このままじゃわし死ぬな」

そりやあ体中がバラバラに引き裂かれようとしておるんじゃ、強化に障壁を張っていなかったら既にわしは死んでいた。

「まあこれを実効化する方法も思いついたが」

取り合えずわしも回転した、龍とは逆方向に、同じくらいの速さで。すると次第に竜巻が次第に収まり始め完全に相殺された。

あたりに浮かぶのは薄紫の魔力と蒼い魔力じゃ……………うぶ。

「おええええええええええええ」

やっぱり回転はきつかったのお、ものすごく気持ち悪く…………ゲボ
ロシアア！！

「げほげほ……流石にきつついのお……」

目の前の龍はわしの事を敵としか見ておらぬ、いや……さっきまで

はえさ程度だったんじやろうが……。

「もう少しだけ足掻かせてもらおうぞ」

「ギヤアアアアアアアアアアアアアアアオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオンン！！！」

龍が咆哮し空間が歪む……。

全く、わしを転生させた神はどうしてわしをルシエの里に送ったん
じゃろうか？

この龍は本当に強い……それこそわしが今まで戦った敵の中では最高クラスじゃろうて。

「撃たせると思うか？」

口の中で莫大な魔力を収束していたので顎に一発打たせて貰った。その衝撃で口を閉じ口の中で爆発したらしいが

「グギヤアアアアア！」

龍がわしを落そうと鱗を発射した、すぐに新しい鱗が生えてくるよ
うだ。

まるでマシンガンじゃな、それも日本刀のように鋭利じゃ。

現にわしの体に切傷が出来ておる。

このままじゃ 本当に殺される。

「せめて洗脳、できれば服従させる事が」

あれがあつたな、やってみる価値はあるのお。

「じゃがまず近づくかといけないなあ」

そう言いながら黒い尖った棒を取り出す。

「行くぞ龍よ」

「ギシャアアアアアアアアアアアアアアアアアア
！！！」

と言っても本当に刺せるかどうかなんじゃが。

数で攻めるや他の転生者なら弱点を突くなど色々とやれるんじゃないやろ
うがわしは一人、殺す事も出来ないからなあ。

「ぐっ！！」

あ、今右腕が切り取られた。

「そーい、や三人の神のうち転生者は天使じゃったかな？」

羨ましいのお、天使ならば痛覚を遮断する事が出来るんじゃないから。

たとえそうでなくても生えてくるんじゃない。

「クッ……やはり戦いを経験していない体ではここまでが限界か……」

やはりと言った感じじゃな、前世での戦闘方法ではこの体では使えんしもろすぎる。

「じゃがこゝまでくれば――！」

そして持っていた黒い尖った物を龍の首に投擲し、それはそのまま龍の首に深く突き刺さった

「ガア！！！！？」

龍は一瞬だけうめき声を上げるがそれに怒り、尾を振り下ろしてきた。

それはそのまま無慈悲に振り下ろされる。

「間に合うか？」

ドンッ！！

そして尾は振り下ろされた。

「間に合ったようじゃのお」

何とかじゃがな……………。

「カッ……………」

龍は痙攣しておる、そりゃそうじゃ、わしの特典の一つ輪廻眼を使わせてもらっておるからのお。

もつとも死体ではないぶん、洗脳も殆ど意味を成しておらぬしこそしても気を抜けばわしが乗っ取られる。

「ぐっ!!」

体中が軋む、ここまで痛めつけられたのは死ぬ直前か？

じゃがこれをせねばわしは死ぬ。

「ハア、ハア、ハア」

懷から取り出したのは歪な短剣……………。

「破戒すべき全ての符」
ルール・ブレイカー

その短剣を突き刺し、無理やり契約をする。

ある意味便利じゃなコレは……………。

正確にはわしが召喚したときに出来たリンクを解除しより強力な物に上書きしたんじゃないが。

ようやく龍が大人しくなりおったわ。

さてと、まずは腕を探さなくてわな。

「あつたな」

そこら辺に転がっていた、かなりずたずたになっておる。

「復元」

まあわしの持つ魔法の一つである復元魔法があれば問題は無い。

「治療」

そして完全に復元した腕をつけ魔法で治す。

「よし、治ったわい」

ふう、疲れた。

「やばいな、流石に貧血で」

あ、意識が

転生者と言っても所詮は人間じゃ！！（後書き）

リヨク

「はい、『誰もがだらける怠惰な日々』の始まり」

ルナ

「何ですか？そのコーナー名は？」

リヨク

「このあとがきのコーナーだね、質問とか来たりしたら答えたりするやつだね」

ルナ

「それ以前に来るのかどうか」

リヨク

「来なくてもキャラ紹介とか色々なコーナーやりたいしネタ切れになるまでやるよ」

ルナ

「そうなんですか」

リヨク

「ソーナンドス！！つーわけでこれから質問なんでもアリね！！よほど酷い暴言や批判は無視するけど」

ルナ

「なら一つ聞きたいんですけど、四人目の転生者の強さなんです………なんですかあの強さ」

リヨク

「言っておくけどあれでも転生者の前世の実力とは天と地の差があるよ」

ルナ

「化物じゃないですか」

リヨク

「まあ化物だね、生前は惑星単位を滅ぼしているお方だから」

ルナ

「そして何でそんな化物を転生者にしたんでしょうかそっちの神は」

リヨク

「あの神様が転生者にする奴は生前何かを成し遂げ人の噂にならな
いと駄目だからね」

ルナ

「それで私の出番は何時ですか」

リヨク

「暫くは出てこない」

ルナ

「……」

リヨク

「ちょっと待って！何そのバットはそれで殴るつもり

」

時間は早く進むのお（前書き）

ようやく主人公の名前が……
そしてヒロインも登場です。

ただヒロインの性格が……

時間は早く進むのお

「ふう、……………ここまで来れば安全かの？」

わしは少し前にルシエの里を追い出された、まあ理由は既に分かっているがの。

時空管理局と名乗る奴が長老を脅しておったのじゃ、正義とか言う奴は信じられん、過去に何かがあって他人にそんな目にあって欲しくないと言うのは理解できるがの。

「全く、この老いばれがそんなに珍しいか？」

まあ珍しいと言うよりは戦力じゃろうな……………。

「少なくとも追っては来ないようだしの」

あたりを警戒しながら見回す……………よし、居ない。

「さてと、他の転生者と戦う為にも道具を作らんな」

戦争を行うのじゃ、準備だけは怠ってはならん。

「少なくとも拠点が欲しいのお、霊脈がある地で研究所があれば良いのじゃがな」

前世でも霊脈は存在したしのお、あれは星の生命力と言っても良い

ものじゃからな……探せばあるかのお。
もっともわしの希望通りの物があるとは思えぬがのお。

……あつたぞ……。

わしの望み通りの物じゃ。

白い研究所、面積はまあまあじゃが小さくは無いのお……少し大きいくらいじゃが。

霊脈としても優秀じゃ大きさは結構でかいのお、まあこの一研究所からは人間の血の臭い《……………》。

「マトモな施設ではないじゃろうな」

侵入はいとも簡単だったがな……。

よし、最深部に着いた。

白衣を着た大人三人に金髪の子供一人か

「……………コレも失敗作か」

「リンカーコアは正常に作動している」

「だが声が出ない」

なるほどのお、失敗作だから処分と言う事か……………
わしならば声帯くらい簡単に治せるがなあ、声については本人が出せるようにならないといかんしのお。

「だがこれは今までで最高の魔力だったんだが……」

「いや、もったいないがコレは失敗作だ、処分すべき」

「そうじゃな、命を粗末に扱う御主等は処分されるべきじゃな」

さすがに切れたからのぉ……、いくらなんでも命を粗末に扱っては
いかん。

取り合えず真ん中の男の首を折り、魔力弾で二人の首を破壊させて
もらった。

首を折られた男以外は暫くは呻いておったがすぐに絶命した。

少女は啞然としておった、いや、性格が無いと言つべきかのぉ。

「お嬢ちゃんよ」

お、どうやら反応はするようじゃ、ってこれは……

「虹彩異色症か」
オッドアイ

珍しいのぉ、遺伝子疾患かは分かんが疾患があるのであればきつ
ちりと治療しなくてわな。

「まあいい、わしと一緒に来ぬか？」

あれから数年、もうわしの肉体年齢は9歳じゃ。
じゃが背は特別に高いのじゃがな。

あの後研究所はきっちりと掃除して色々改造してわし専用の神殿に
へと変わった。

あの研究所も時空管理局の研究所じゃったため色々とデータを削除
させてもらったがのお。

「アキヤ、お茶を持ってきたてほしいのお」

「おう、分かったぜソラウー!!」

……良い子に育ったもんじゃ。

今更じゃがわしの名前はソラウネル・ル・ルシエじゃ、容姿Fat
eのメディアの幼き頃の姿じゃ。

そしてアキヤは金髪の少女じゃ、虹彩異色症の子じゃったが声帯が

すこしイカれてる程度じゃった。

無論治したがそれでも言葉を覚えさせるのには苦労したのお。

それに女の子には女の子っぽい言葉使いにしてみらいたいんじやが。

「持ってきたぞソラウー!!」

「すまんのぉ」

「これくらいどうってこと無いって!!」

そう言って笑うアキヤ、孫を見ているようじやのぉ。

「さて」

まだジュエルシードは発掘されておらん、正確には今発掘されようとしておるんじやが。

「へえ、これがソラウの次の狙いのロストログアなんだ」

「そうじゃ、こいつの魔力をアレに取り込ませれば」

「なら俺が盗って来るよ、発掘した時に」

「いや、これはまだ良い」

「どうして?」

「まだ時間じゃないしのぉ」

さて、これが地球に落ちた時に回収するかのぉ。

それならばわしの所有物になるわけじゃし。

「じゃが手駒が欲しいのお」

ただ殺すのではなく………ちゃんとした手段でじゃ。

「分かったよ、俺が盗ってくる………ちょうど気に入らない場所があるし」

何時に無くやる気じゃのお。

「そうか、すまんのぉ」

「良いよ、ただ俺が盗ってきたら一緒に寝て欲しいだけだから」

「別に構わんぞ」

「じゃ……行つて来る……!」

そう言つてアキヤは出て行つた。

「さてと………わし個人としてはもう少し遅く完成させたかったんじゃないが………」

わしは前を見る、そこには巨大な牙を持つ爬虫類が居た。

「この一年で完成できるか」

「アハハ！！ねえ、ラミア！！」

何ですか？マスター

アハハ！！凄く嬉しい！！。

「これが終わったら一緒に寝てくれるんだよ！！ソラウがだよ！」

……良かったですね！マスター！！！

そう、俺はソラウが大好きだ！！

世界中を敵に回してもそれを殲滅して世界で二人きりになってアダムとイヴみたいな関係になってもいいと思ってるしぶっちゃけソラウを敵と思う奴は全員骨になればいいと思ってる。

「だからさ！この仕事は……皆殺しで良いよね」

もちのロンです、マスター

「希少な物は持ち帰るけど実験なんかしてる奴は殺す、生かさず殺

さずじやない……即殺す……急所を一撃でしとめる」

戦場では相手を生かすという意味は無い、戦争とかで投降してきた奴ならともかく外道な実験をしてる奴は殺す。

「ソラウは優しいからさあ、見逃したりしてるけどねえ……逃げた奴が居たら駄目なんだよ」

ソラウの敵は殺す、ソラウが認めても俺が認めない。

「だからさあ、ソラウの敵は一族郎党皆殺しで良いよね」

YES!!

「アハハハハハハハ！よし！！やる気でできたあ！！」

時間は早く進むのお（後書き）

リヨク

「よし！更新完了！！」

ルナ

「ともかく私の出番も近くなってきましたね」

リヨク

「そうだねえ」

ルナ

「で、あの俺っ子の性格やばくないですか？」

リヨク

「性格だけじゃなく能力もヤバイよ、ぶっちゃけ負け犬の十倍強いし」

ルナ

「これは依存ですね、もしアキヤからソラウを離したらどうなるんですか？」

リヨク

「一ヶ月でその次元世界の生命体の殆どが死滅する」

ルナ

「一体どんな能力なんですかそれは」

リヨク

「ヒントは有害」

ルナ

「それでは次回をお楽しみに」

リヨク

「ねえ！！ちょっと無視！！？」

お前のものは俺のものって最強のジャイアニズム

世界はいつだってこんな事じゃなかったことばかりだ。
まさにそれがこの光景にあっているだろう。

「ふん、もう終わり？」

一人の少女が屍の頭を踏み立っていた、その姿はまるで殺戮者。

「まあいいや、取り合えずコレは回収ね」

少女、アキヤは扉の前に立ち……手を翳した。

「はっ！！」

そしてそのまま拳を作り殴った、「ピー」と言う機械音が鳴り扉は開いた。

「うん、やっぱりこの技は良いね」

そのまま歩き進むアキヤ、その姿は王そのものだった。

「お、あつた！！」

アキヤは目的の物を見つけた、その目的の物とは赤い髪の小人だった。

「ひ……………」

小人はアキヤを恐れて悲鳴を上げる。

「まあ恐れられるのは別に良いんだけどよ」

そう言いながらアキヤは小人を片手で優しく掴み握る。

「まあ助けに来たからもう大丈夫だぜ、とでも言つべきか？」

「助け？」

「おいおい、ここまで精神崩壊する実験なんて聞いてないぞ、いや……あまり言いたくなかったのか？」

アキヤはそのまま小人を持ったままその部屋から去ろうとする、だがそれを阻むものが居た。

「ま……………待て」

研究員の一人だった、口からは血を大量に吐いている。

「へえ、まだ生きてたんだ」

「か、返せ」

「やだよ、死んどけ」

アキヤの体が虹色に光ると研究員の口から大量の血が流れ出る……

…。

手も地に落とし白目になる……………完全に命を失った。

「ああ、全く……………俺だって別に殺す事が趣味じゃないのになぁ」

その後に「まあソラウに敵対する者は容赦なく殺すけど」と言った。

「おお、お帰りアキヤ」

「ただいまー!!」

おお、ようやく帰ってきたのお。

「ソラウー!!」

いきなりアキヤが抱きついてきた。

「全く、この子は」

「えへへへへ」

どうしてこんな子になってしまったのか、やはりこの子には普通の

生活があつてと思うのじゃがなあ。」

「で、そやつがユニゾンデバイスか？」

「ああ、つっても俺じゃあ相性が悪すぎて使えないけど」

「わしも無理じゃ、似ているが無理じゃしな」

良く眠つておるのお……………この子の相棒は見つかったらにしようか。

「さてと、今日は寝るかのお」

「はい!」

あれから一カ月後……………。

「ふうむ……………あれが転生者」

あの女顔の奴が転生者か……………ふむ、何と云うか

「可愛い外見に反して外道な顔をしておるのお」

やはりと言つか……………何と言つか……………

「今のわしでは手こずるのお、負ける気はせんが」

やはり準備は怠らなくて正解だったようじゃ……。他の二人、正確には一人なのじゃが協力はできんのお……はっきりに言ってしまう足手まといにしかならん。

「脱落者が出たのは痛いのお」

やはり……。あの外道は倒さねばならぬな。

「ほお、これでジュエルシードは合計21個見つかったようじゃな」

「じゃあ取りに行くね、俺があつたババアの方に、ソラウが管理局のジュエルシードを盗りに」

作戦開始じゃな、失敗はできんのお。

あ、どうもルナ・ベルツです、何か初めてな感じがします。それはともかく婆の言葉を我慢しましょう（笑うのを）。

「大嫌いだつたのよ!!」

そしてフェイトが崩れ落ちる。
床に落ちたバルディッシュは砕け散り、それはまるでフェイトの心
のようで。

一方、私はというと、

【ぷ、あははははははははははは！ひ、ひい！駄目、笑い
死ぬ！聞きましたか、負け犬さん！これで私の完全勝利です！や
ゝい、負け犬負け犬ゝ】

念話で盛大に負け犬を罵っていました。

そうでもないと言表情が崩れて大笑いしていたでしょうから。

後で聞くと、その時の私は唇をかみ締め目に涙を溜めていて、とて
も痛々しい姿だったらしいです。

フェイトのことを自分のことのように悲しんでいるのだと。

「がっ……ガハ！？」

………は？

えっと、私は何を見ているのでしょうか？

あの婆が虹色のレーザーで心臓を貫かれています………。

「もううざいから黙れ、クソ婆」

あ、婆がそのまま倒れました……………血がどんどん流れて……………

「はいはい、ジュエルシード回収完了」

その声は少女ですね……………

一体どういうことなんでしょうか？

ガシャン！！！

「……………うわ！！？」

凄じ揺れましたね、これはどういうことなんでしょうか？

「……………ジュエルシードは貰い受けるぞ、管理局」

って何ですかこのジジイ声は……………。

「それとそこの女顔」

って私？！

「お主は生まれた性別を間違えたな、今からでも去勢すべきじゃ」

「どういいますかそれ　　！？」

「さらばじゃー！！」

「ちよっ！！」

逃げられました、一体誰なんでしょう……。
教授、こんな展開知りませんよ。

お前のものは俺のものって最強のジャイアニズム（後書き）

今回は無しです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4660z/>

第二の人生はゲームの妨害？

2011年12月25日21時45分発行